

高齢期における職業経歴と社会参加

—最長職に着目した分析¹—

伊達平和
(滋賀大学)

【論文要旨】

社会参加に関する研究では、学歴、収入、職業といった社会経済的資源が多いほど、社会参加に結びつくという資源仮説が検証されてきた。一方で、これまでの分析は若年者から高齢者まで対象にした一般的な知見にとどまり、高齢期に限定した分析は乏しい。また、資源仮説の中でも職業については、現職が用いられる事が多いが、これまでの職業経歴を考慮した分析はなされていない。以上をふまえて、本稿では高齢期における、投票、政治活動支援、市民運動、ボランティア、自治会・町内会といった社会参加の5つの形式について、社会経済的資源との関連を明らかにする。特に、職業については人生の中で就いていた時期が最も長い職業を示す「最長職」に着目して分析を行う。分析の結果、第1に、高齢期においては投票、自治会・町内会、ボランティア、政治活動支援、市民運動の順番で参加しやすいことが明らかとなった。第2に、社会経済的資源は社会参加と関連しているが、その中でも最長職はボランティア参加と特に結びついており、専門・管理職の場合、ボランティア参加を有意に高めることが明らかになった。以上の知見より、高齢期において、資源仮説は社会参加を説明する要因として重要であること、また一部の社会参加の形式については、最長職に焦点を当てることの重要性が示された。

キーワード：高齢者 社会参加 最長職

1. はじめに

少子高齢化が世界で最も進んでいる日本において、高齢期の肉体的／精神的健康をどのように支えるかという課題は重要である。この高齢期の肉体的／精神的健康に与える要因については、食生活、運動、ソーシャルサポートなどの数多く指摘されている（小熊ほか 2014）。その中でも、近年特に注目されているものに高齢者によるボランティア活動などの社会参加活動がある。社会活動参加は、生きがいを創出したり、さらに肉体的／精神的健康を高めることが多くの研究が指摘している（Choi and Kim 2011, 藤原ほか 2005, Willigen 2000）。さらに、ボランティア活動に代表されるような社会的な活動は、高齢者の健康のみならず、一般的に参加型市民社会を作っていく上で大いに期待されている（仁平 2011）。ボランティア活動のみならず、選挙への動員や政治運動への支援は社会制度を

¹ 本研究は、JSPS 科研費 JP25000001 の助成を受けたものです。

設計する政治に影響を与え、また市民運動も間接的に影響を与えている。また自治会・町内会への参加はローカルな政治に影響を与え、ますます市民の関与が求められている。さらに2018年2月に定められた高齢社会対策大綱においても、これまで的高齢社会対策大綱と同じく、高齢者の社会参加は重要な課題だと取り上げられている（内閣府2018）。

このように、高齢者の社会参加は、健康を増進するのみならず、健全な参加型市民社会を構築する上で重要だといえよう。しかし、我が国において全国サンプルを用いた社会参加についての実証的研究は、幅広い年齢層を対象にした分析はあっても、高齢者の分析については、その蓄積が進んでいない。また、先行研究は社会経済的な資源と社会参加の関連に焦点を当ててきたが、資源の中でも職業については現職を用いており、高齢期に至るまでの職業経歴が検討されていない。

以上の問題関心にもとづき、本稿では65歳以上の高齢者について、社会文化的資源が社会参加に与える影響について、特にもっとも長い職業経歴を示す「最長職」に着目しつつ分析を行う。続く2節では先行研究を整理して分析視角を定める。そして3節で使用するデータと変数を整理し、分析方法についてまとめる。4節では2015年SSM調査を使用した分析結果を示す。最後に分析結果より、高齢期における社会参加について、どのような職業経歴を持つ人がどのような形式の社会参加を行うのか明らかにする。

2. 先行研究

本節では、先行研究のレビューを通して、社会参加についての分析視角を整理していく。まず、社会参加について分析した先行研究の中で、本稿でも用いるSSM調査を用いたものに仁平(2011)があげられる。仁平は、2005年のSSM調査で収集された様々な「参加」について、網羅的な分析を行っている。具体的には「投票」「政治や選挙への支援」「市民運動への参加」「ボランティア活動への参加」「自治会町内会への参加」の5項目について、学歴、収入、職業といった社会文化的資源に焦点をあてて分析を行った。その結果、全体としては社会経済的地位が社会参加に影響を及ぼし、特に資産を多く持つ人々ほど社会参加を行うという結果を得ている。さらに、また世帯年収は投票と自治会・町内会で関連しており、高階層な人ほど参加をしている。教育は投票とボランティアと正の関連をしているが、自治会・町内会とは負の関連をしている。現職については、ホワイトカラーなどの新中間層よりも、自営や農業といった旧中間層の方が社会参加しやすいことを指摘している。同様に2005年のSSM調査を用いたものに岩間(2011)がある。岩間は自治会・町内会、市民活動、ボランティアの3つを中間集団への参加と位置づけ、男女別の規定要因について分析を行っており、男女によって職業や学歴の効果は異なるが、男女とも共通して経済的な資源が多いほど社会参加に結びつくことを明らかにしている。

この仁平と岩間の研究は、同じ社会参加を研究対象にしているが、分析モデルや変数が大きく異なっているため、単純に比較することはできない。ただ、両者について共通して指摘できるのは、SSMのサンプル全体を対象にしており、高齢者の分析となっていない点で

ある。これは 2005 年までの SSM 調査が 70 歳以上を対象にしてこなかったというデータの限界を反映している。他にも、社会参加の中でもボランティアに関する研究は多くなされているが（宍戸 2008；寺澤 2013；三谷 2016 など）、同様に、高齢者を対象にしている研究は少ない。このように、社会参加活動の研究の分析対象についてみた場合、高齢者は盲点で有り続けているといえよう。

それでは、高齢期の分析については、どのような研究があるだろうか。高齢期の分析は地域を限定した先行研究がいくつか挙げられる。例えば、東京都と埼玉県のデータを用いた安田(2007)や大阪府のデータを用いた岡本・岡太・白澤(2006)、近年では仙台市のデータを用いた桂・佐藤(2017)などの研究があり、信頼できる人間関係量（安田 2007）、失敗不安がないこと、役立つ技術・知識・資格があること（岡本・岡田・白澤 2006）、暮らし向きや活動参加への誘い（桂・佐藤 2017）が高齢者の様々な社会参加に結びつく可能性を指摘している。しかし、いずれの研究においても、仁平（2011）や岩間(2011)が注目してきたような、社会文化的資源への視点は乏しい。よって本稿では、全国サンプルを用いた高齢期の分析を行うにあたって、社会経済的な資源が社会参加に結びつくとする資源仮説に焦点をあてて検討を行う。

ただし、高齢期の分析においては社会経済的資源のうち、職業の指標として現職を用いるべきか検討する必要がある。一般的に定年が 60 歳～65 歳であることを考えると、高齢期では無職比率が高くなり、仕事を続けている人々は限定的である。本稿で用いる SSM 調査においても、現職でなんらかの仕事についている人は、33.9%と約 3 分の 1 である。この点について、高齢期の健康について分析した石田（2006）は、最も働いた期間の長い職業（以下最長職と表記）を用いて分析を行っている。つまり、高齢期においては、現職ではなく、これまでの仕事の蓄積が高齢期における意識や行動に影響を与えているという可能性がある。またこの最長職は、人的資本論の立場からは、職場訓練を通じて能力の蓄積過程としても捉えることが可能である（Becker 1964=1976）。つまり同じ職業を長く続けることによって、その仕事に応じた専門性や対人能力が高まり、高齢期になった時に社会参加への橋渡しとなることも十分に考えられる。よって、高齢期の分析においては、社会参加についても、現在の職業ではなく、これまでの職業生活の中で最も長く経験した職業に着目する必要がある。

以上の議論をふまえて、本稿では高齢期の社会参加について、社会経済的資源が影響を与えているとする資源仮説について、特に最長職の影響に焦点を当てて分析を行う。

3. データと変数

3.1 使用するデータ

本稿では 2015 年社会階層と社会移動調査研究会によって行われた「人生のあゆみと格差

に関する全国調査」(以下 SSM2015) を使用する²。本調査の対象者は 2014 年 12 月末時点で 20～79 歳の日本国籍をもつ男女である。対象者の抽出は層化 2 段無作為抽出法 (800 地点を抽出) により、面接調査と留置調査の併用法で調査がなされた。調査時期は 2015 年 1 月 31 日～3 月 22 日 (第 I 期)、2015 年 4 月 4 日～5 月 24 日 (第 II 期)、2015 年 6 月 6 日～7 月 26 日 (第 III 期) である。有効回収数は 7,817 票、有効回収率は 50.1%であった。SSM 調査は 1955 年から 10 年おきに継続して調査がなされているが、70 歳以上の高齢者を対象者に含めたのは SSM では初めての試みである。質問項目には投票、政治活動支援、市民運動、ボランティア、自治会・町内会に対する参加行動が含まれており、さらに初職から現職までの間断のない職歴データが含まれていることから、本稿の課題を遂行する上で最適なデータとなっている。なお、分析に使用する 65 歳以上の回答者は 2297 名であり、高齢者に限定した分析を行うにあたり、十分なサンプルサイズを確保できている。

3.2 従属変数

従属変数は「投票 (国政選挙や自治体選挙の際の投票)」「政治活動支援 (政治活動や選挙活動の支援 (署名や資金カンパを含む))」「市民運動 (市民運動への参加)」「ボランティア (ボランティア活動への参加)」「自治会・町内会 (自治会・町内会活動への参加)」への参加を示すダミー変数である (括弧内は調査で使用されたワーディング)。SSM2015 では、「あなたはふだん次にあげるような活動をどの程度していますか」という質問に対して「いつもしている」「よくしている」「ときどきしている」「めったにしない」「したことがない」という 5 点尺度の選択肢で社会活動の程度について尋ねている。本稿では、ボランティア活動への参加を分析した三谷 (2016) と同様に「いつもしている」「よくしている」「ときどきしている」と回答した人々を参加層として含め、それ以外を不参加層とするダミー変数を作成し、従属変数として用いた。

3.3 独立変数

職業に関する独立変数は、職業経歴の中で最も長い間働いた職業を示す「最長職」を用いる。SSM 調査では、初職から現職まで間断なく職業経歴を尋ねている。それぞれの経歴について、就業上の地位、仕事の内容、役職名を尋ねており、本稿では「仕事の内容」を回答者の職業とみなしている。最長職の特定には、初職から現職までの期間のうち、最も長い年数働いた仕事の内容を判別し、SSM 職業 8 分類にもとづいて専門・管理職、事務・販売職、その他 (熟練・半熟練・非熟練・農業) の 3 カテゴリに分類した³。なお本稿では短く

² 分析には 2017 年 2 月 27 日版 (バージョン 070) のデータを用いて分析を行った。

³ SSM 調査は仕事に何らかの変化があった場合、その変化の始まりの年齢と終わりの年齢を全て取っているため、約何年間その仕事をしていたのか計算することができる。なお、頻繁に仕事の内容が変わっている回答者については、仕事の経験の年数が同じであるなどの理由により特定が困難なケースが 30 ケースあったが、そのような場合には SSM 8 分類で同

ても職業についていると何らかの経験や能力を得ていると捉え、無職期間が最も長い最長職「無職」のカテゴリは作成しなかった。また、女性の回答者の中には一度も職業についていない人が 52 名いたが、「家事サービス職業従事者」が含まれる「その他」に含めた。

その他の独立変数には、女性ダミー（女性＝1、男性＝0）、回答者の年齢（連続量）、学歴（初等、中等、高等の3カテゴリ）、世帯年収（無回答も含む7カテゴリ）、有配偶ダミー変数（有配偶＝1、無配偶＝0）、同居家族人数（4カテゴリ）、有職ダミー変数を投入した。

分析は以下の手順で行う。まずクロス集計によって最長職と5つの形式の社会参加活動の関連について分析する。続いてロジスティック回帰分析によって、ほかの変数を投入してもなお最長職と社会参加活動の関連がみられるか明らかにし、さらにほかの社会経済的資源との関連についても明らかにする。

3.4 記述統計

本項では、記述統計から、データの特徴についてみていく。まず使用する従属変数の回答分布について表1に示す。

表1 従属変数の回答分布

	投票		政治活動支援		市民運動		ボランティア		自治会・町内会	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
いつもしている	1635	71.2	78	3.4	53	2.3	145	6.3	470	20.5
よくしている	386	16.8	126	5.5	100	4.4	193	8.4	506	22.0
ときどきしている	178	7.7	492	21.4	341	14.8	500	21.8	783	34.1
めったにしない	64	2.8	689	30.0	658	28.6	577	25.1	310	13.5
したことがない	34	1.5	912	39.7	1145	49.8	882	38.4	228	9.9
参加層	2199	95.7	696	30.3	494	21.5	838	36.5	1759	76.6

表1によると、高齢者の社会参加はその分野によって異なっていることがわかる。まず最も多いのは投票への参加であり、「ときどきしている」までを参加層と考えた場合、ほぼ全員の95.7%が参加している。また「いつもしている」という回答者も71.2%と多く、高齢者の大部分がいつも投票に行っていることが分かる。次に参加層が多いのは自治会・町内会への参加であり、76.6%が参加している。ただし、自治会・町内会については「いつもよくしている」回答者は20.5%と、投票に比べると、積極的に参加している人が多いわけではない。

じカテゴリに含まれる仕事を計算して特定し、またそれでも特定できないケースについては現職に近い仕事を最長職とみなした。情報不足により処理できないケースは男性で5ケースであり分析から除外した。

一方、政治活動支援、市民運動、そしてボランティア活動は参加層がそれぞれ 30.3%、21.5%、36.5%と、投票や自治会・町内会への参加に比べると参加率が落ちる。特に「いつもしている」「よくしている」と答える積極的に参加している高齢者は10%前後であることから、参加するハードルが高いことが伺える。

次に、独立変数についての記述統計量を表2に示す。

表2 独立変数と統制変数の記述統計量

独立変数	全体(n=2297)	
	Mean (%)	SD
女性ダミー (%)	52.07	
年齢	71.52	4.49
学歴 (%)		
初等	31.1	
中等	51.4	
高等	17.5	
世帯年収 (%)		
0～125万	4.4	
125万～200万未満	7.1	
200万～300万未満	15.2	
300万～400万未満	16.4	
400万～550万未満	13.9	
550万以上	15.0	
無回答	28.0	
最長職 (%)		
専門・管理	12.1	
事務・販売	40.2	
その他	47.8	
有配偶 (%)	76.9	
同居家族人数 (%)		
独居	12.7	
2人	46.6	
3人	21.1	
4人以上	19.6	
有職ダミー (%)	33.9	

まず、最長職をみると、専門・管理職が最も長い職業だった人は12.1%と、全体の1割程度である、またその他の職業は、熟練職、農業と無職であり47.8%と最も多いカテゴリとなっている。その他の特徴としては、性別はほぼ半々、学歴には中等学歴が多い、有配偶が多く、独居をしている人は12.7%であり、誰かがなんらかの人と同居をしている。また働いている人約3分の1程度である。

それでは、5つの社会参加の参加率は、これまでの職業経歴によってどの程度差異があるのだろうか。次節では、社会参加と最長職との関連について、クロス集計からみていく。

4. 分析

4.1 クロス集計による分析

本節では、前節の記述的な分析をふまえて、それぞれの社会参加について「いつもよくしている」から「ときどきしている」までを参加層と定義し、最長職との関連を分析する。図1は、最長職別に参加者の割合についてクロス集計した結果である。

まずもっとも参加が一般的であった投票と、次に参加者が多かった自治会・町内会をみると、最長職との関連はみられない（投票： $X^2=4.086$, $df=2$, $p=0.130$ 、自治会・町内会： $X^2=0.259$, $df=2$, $p=0.878$ ）。この2つの社会参加は、どの経験を持った人にとっても一般的な社会参加の形式だと考えられる。

次に、市民運動をみると事務・販売職であれば、若干参加割合が低い、専門・管理職とその他の職業が長かった人については、参加率が高い。この結果は10%水準で有意傾向であった（ $X^2=4.983$, $df=2$, $p=0.083$ ）。

政治活動支援とボランティアについては、最長職との関連が他の社会参加に比べると差がある。まず政治活動支援は専門・管理職であると36.8%となり、他の2つの最長職と比べると参加する人が多く、この傾向は5%水準で有意である（ $X^2=6.640$, $df=2$, $p<0.05$ ）。最後にボランティアがもっとも差があり、専門管理職であれば、ボランティアに参加する人は51.3%であり、次点の事務・販売職の35.4%と比べると15.9ポイントの差がある。この傾向は0.1%水準で有意である（ $X^2=30.392$, $df=2$, $p<0.001$ ）。

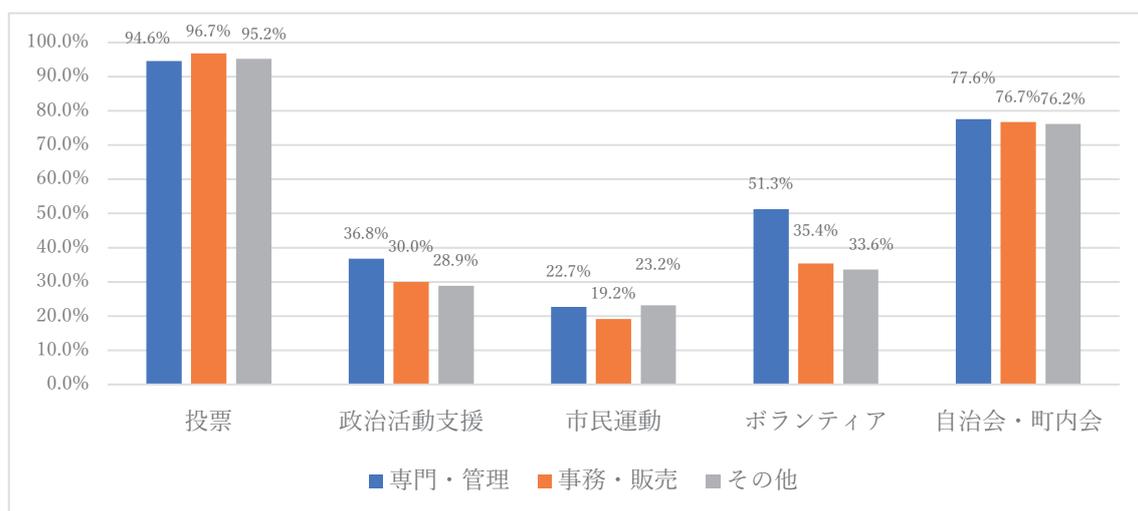


図1 最長職と社会参加の関連

以上のクロス集計による分析からは、比較的参加することが一般的である投票や自治体・町内会においては最長職と社会参加の関連がみられず、参加することが比較的一般的とはいえない政治活動支援、市民活動、ボランティアでは、概して専門・管理職の経験が長い人であれば、参加するという関連がみられた。それでは、この結果はほかの変数を統制した場合でも同じような結果がみられるのだろうか。この点について、多変量解析によって、この点を明らかにする。

4.2 多変量解析

本項では、5つの社会参加の形式について、二項ロジスティック回帰分析によって最長

職や社会経済的資源と社会参加との関連をみていく。それぞれの社会参加について参加層を1とし、非参加層を0とした参加ダミー変数を従属変数にし、独立変数を全て投入した二項ロジスティック回帰分析の結果を表3に示した。

まず、最長職についてみると、投票とボランティアでのみ有意な結果であった。投票では、専門・管理職が最長職である場合、その他のブルーカラーの仕事に比べると参加するオッズが0.484である。一方、ボランティアについては、最長職が専門・管理職の場合、その他のブルーカラーの仕事に比べると参加するオッズが1.871となり、参加しやすくなる。その他の社会活動については、最長職との関連はみられない。

表3 高齢者の社会活動参加についての多変量解析結果

	投票			政治活動支援			市民運動			ボランティア			自治会・町内会							
	B	S.E.	Exp(B)	B	S.E.	Exp(B)	B	S.E.	Exp(B)	B	S.E.	Exp(B)	B	S.E.	Exp(B)					
女性ダミー	.334	.233	1.397	-.065	.100	.937	-.574	.112	.563	***	-.202	.096	.817	*	.008	.109	1.008			
年齢	.029	.025	1.030	-.002	.011	.998	.005	.012	1.005		-.002	.010	.998		-.004	.012	.996			
学歴																				
初等(ref.)																				
中等	.707	.247	2.028	**	.302	.116	1.352	**	.204	.127	1.227	.275	.110	1.316	*	.365	.122	1.440	**	
高等	.950	.396	2.585	*	.287	.164	1.333	+	-.324	.191	.723	+	.153	.157	1.165		-.241	.172	.786	
世帯年収																				
0~125万(ref.)																				
125万~200万未満	.699	.467	2.011		.391	.350	1.478		.208	.368	1.231	.232	.302	1.261		.034	.276	1.034		
200万~300万未満	.711	.441	2.036		.520	.328	1.681		.065	.349	1.067	.044	.285	1.045		-.004	.262	.996		
300万~400万未満	.937	.489	2.552	+	.769	.332	2.158	*	.343	.353	1.409	.342	.289	1.408		.224	.277	1.251		
400万~550万未満	2.182	.704	8.863	**	.944	.337	2.571	**	.457	.358	1.579	.324	.295	1.382		.254	.286	1.289		
550万以上	.808	.519	2.244		.938	.340	2.555	**	.369	.364	1.447	.477	.297	1.611		.247	.291	1.281		
無回答	.557	.438	1.746		.646	.328	1.908	*	.538	.346	1.712	.345	.284	1.411		.089	.266	1.093		
最長職																				
専門・管理職	-.726	.362	.484	*	-.168	.164	1.183		.094	.186	1.098	.626	.158	1.871	***	.198	.188	1.218		
事務・販売職	.082	.256	1.085		-.036	.108	.964		-.134	.122	.875	.048	.103	1.049		.002	.117	1.002		
その他(ref.)																				
有配偶	1.210	.288	3.353	***	.238	.157	1.269		.511	.191	1.666	**	.400	.151	1.491	**	.522	.154	1.685	**
同居家族人数																				
独居(ref.)																				
2人	-.451	.384	.637		-.115	.218	.892		-.336	.253	.715	.010	.208	1.010		.066	.207	1.068		
3人	-.633	.430	.531		-.057	.233	.944		-.341	.270	.711	-.060	.224	.942		.078	.229	1.081		
4人以上	.167	.472	1.182		-.001	.236	.999		-.376	.273	.687	.140	.226	1.150		.208	.235	1.231		
有職ダミー	-.189	.238	.828		.304	.102	1.355	**	.234	.114	1.264	*	.127	.099	1.135		.245	.117	1.278	*
定数	-.756	1.850	.470		-1.821	.867	.162	*	-1.970	.960	.139	*	-1.278	.818	.279		.608	.901	1.837	
Cox & Snell R2	.028			.030			.033			.037			.029							
Nagelkerke R2	.093			.043			.050			.050			.044							
n	2297			2297			2297			2297			2297							

Note. +p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001.

その他の社会経済的資源をみると、学歴については投票、政治活動支援において初等教育よりも学歴が高い場合に参加しやすく、ボランティアや自治会・町内会への参加については中等学歴においてその傾向が顕著である。市民運動については、高等教育を受けている人ほど参加しないという結果であるが、これは10%水準の有意傾向にとどまる。収入についてみると、投票と政治活動支援において関連がみられる。具体的には、概して年収が少ない人に比べると、年収が300万円以上の人は社会参加しやすい。一方市民活動、ボランティア、自治会・町内会については関連がみられない。

その他の変数について、女性ダミーとの関連は、市民運動やボランティアについては女性のほうが参加しにくい。年齢については関連がない。配偶状況についてみると、投票、

市民運動、ボランティア、自治会・町内会において有配偶者であれば参加しやすいという結果となっている。一方同居人数については一貫して社会活動との関連はみられない。最後に現在の職業について有職ダミーについてみると、政治活動支援や市民活動、自治会・町内会については関連があり、働いている人であれば、参加しやすいという結果であった。

以上のように、社会活動の種類によって規定要因は異なることが明らかとなった。年収については政治的な社会参加について概して高階層な人ほど参加しやすい。学歴については市民運動以外の社会参加について、中等教育が最も参加するという結果となった。特に本稿が着目する最長職と社会活動との関連は、高齢期においてはボランティアにおいて、関連が強く見られた。この結果を踏まえて次節では考察を行う。

5. 考察

本稿では、投票、政治活動支援、市民運動、ボランティア、自治会・町内会への参加について分析を行った。まず、指摘する必要があるのは、高齢期において、5つの社会参加の形式は、参加の程度に差があるということである。「ときどきしている」までを参加層に含めると、投票は9割以上の高齢者が参加しており、自治会・町内会への参加でも8割弱の高齢者が参加をしていた。一方、政治活動や選挙運動の支援、市民運動、ボランティアになると、参加率が2割から4割弱であり、明らかに参加率に違いがある。この点については第1に選挙という社会参加の形式の特殊性が挙げられる。選挙は他の社会参加の形式に比べると、参加する機会が限られており、時間や費用といったコスト面についても特に必要がなく、参加のハードルが低い。この点について、自治会・町内会についても、基本的に生活圏の町内で行われることから、参加のハードルが比較的低いと考えられる。一方、その他の政治活動支援、市民運動、ボランティアについては、「ときどき」であっても、ある程度継続的に参加しようと思うと、時間や費用などの参加コストがかかる。また、選挙や自治会・町内会への参加が社会制度的、ある種の強制的な側面があるのに対して、その他の社会参加は、自発的に参加する必要がある。このような社会参加の形式の特徴の差異が、参加の頻度の差を生み出したのではないかと考えられる。

次に指摘する必要があるのは、個人の持つ資源の特徴が社会参加に与える影響について、社会参加の形式によって異なるという点である。特に、本稿が焦点を当てた最長職については、ボランティア参加について明確に関連が見られた。この点については、ボランティア活動の「自分のこれまで培ってきた能力を選択的に活かせる」という特徴が影響している可能性がある。例えば看護といった専門職に就いていた人は、高齢者の介護のボランティアとの親和性が高い。他にも初等教育に携わる人であれば、近年では「子ども食堂」などの子どもの育成に力を入れている団体もみられる。このように、これまでの職業経歴と社会参加は、その人の培ってきた能力という側面で結びついている可能性がある。

一方、その他の資源については、収入が市民運動、ボランティア、自治会・町内会とは結びついていなかったが、政治的な形式の活動、特に政治活動支援に結びついている点も

興味深い。これは、政治活動支援が署名だけでなく、寄付（カンパ）も含まれていることが関係している可能性がある。つまり、経済的な余裕がある高齢者が政治活動に対して金銭的な援助を行っている可能性が指摘できる。最後に学歴について、全般的に初等教育の人に比べて中等教育を受けている人であれば、有意に参加しているという結果がみられた。記述統計より、2015年時点において65歳以上の高齢者では高等教育ではなく、中等教育が一般的であった（表2参照）ことをふまえるなら、高等教育を受けた高齢者は、なんらかのライフスタイルの質的な違いがあるのかもしれない。この高齢者のライフスタイルの質的な違いについては、今後検討する必要がある。

6. むすび

本稿では、高齢期の社会参加について5つの形式について規定要因を比較してきた。日本は高齢化が世界一という社会的条件にある中で、高齢期のWell-beingを支える社会参加は強く求められている。本稿はその社会参加の構造の一端を明らかにしたに過ぎず、社会参加の形式間における細かい規定要因の差異や解釈の妥当性など、課題は多く残されている。今後、このような知見を積み重ねて行くことによって、超高齢社会をどのようにデザインしていくか議論していく必要があるだろう。

【付記】

本論文は伊達（2018）の補論である。伊達（2018）では本論文の内容について、主にボランティア参加に限定して詳細な議論を展開している。高齢期のボランティア参加行動についてはそちらを参照されたい。

【文献】

- Becker, G. S., 1975, “Human Capital: A Theoretical and Empirical Analysis, with Special Reference to Education, Second Edition,” Columbia University Press. (= 1967, 佐野陽子訳『人的資本—教育を中心とした理論的・経験的分析, 東洋経済新報社.)
- Choi, N. G. and J. Kim, 2011, “The effect of time volunteering and charitable donations in later life on psychological wellbeing,” *Ageing and Society*, 31: 590-610.
- 伊達平和, 2018, 「過去の職業経験が高齢期のボランティア参加行動に与える影響—性差に着目した分析」『フォーラム現代社会学』第17号（印刷中）.
- 藤原佳典・杉原陽子・新開省二, 2005, 「ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響—地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義」『日本公衆衛生雑誌』52(4): 293-307.
- 岩間暁子, 2011, 「ジェンダーと社会参加」齋藤友里子・三隅一人編『現代の階層社会 3

- 流動化のなかの社会意識』東京大学出版会, 325-40.
- 石田浩, 2006, 「健康と格差—少子高齢化の背後にあるもの」白波瀬佐和子編『変化する社会の不平等』東京大学出版会.
- 桂理恵子・佐藤直由, 2017, 「地域在住高齢者における社会活動の関連要因—仙台市を事例として」『保健福祉学研究』第15巻: 1-10.
- 三谷はるよ, 2016, 『ボランティアを生まだすもの—利他の計量社会学』有斐閣.
- 内閣府, 2018, 『高齢社会対策大綱 (平成30年2月16日閣議決定)』
<http://www8.cao.go.jp/kourei/measure/taikou/h29/hon-index.html> (2018年2月25日閲覧)
- 仁平典宏, 2011, 「階層化／保守化のなかの『参加型市民社会』—ネオリベリズムとの関係をめぐって」斎藤友里子・三隅一人編『現代の階層社会3 流動化のなかの社会意識』東京大学出版会, 309-23.
- 小熊祐子・富田真紀子・今村晴彦, 2014, 『サクセフル・エイジング 予防医学・健康科学・コミュニティから考えるQOLの向上』慶應義塾大学出版会.
- 岡本秀明・岡田進一・白澤政和, 2006 「高齢者の社会活動における非活動要因の分析: 社会活動に関する参加意向に着目して」『社会福祉学』46(3):48-62.
- 宍戸邦章, 2009, 「中高年の地域ボランティア活動促進要因と地域生活満足—JGSS-2006に基づく分析—」大阪商業大学 JGSS 研究センター・東京大学社会科学研究所編『JGSS Research Series No.5:日本版 General Social Surveys 研究論文集[8]JGSS で見た日本人の意識と行動』: 41-65.
- 寺沢重法, 2013, 「現代日本における宗教と社会活動—JGSS 累積データ 2000~2002 の分析から—」大阪商業大学 JGSS 研究センター編『JGSS Research Series No.10:日本版総合的社会調査共同研究拠点研究論文集[13]』: 129-40.
- Willigen, M. V., 2000, “Differential Benefits of Volunteering Across the Life Course,” *Journal of Gerontology: SOCIAL SCIENCE*, Vol. 55B, No. 5, S308-S318.
- 安田節之, 2007, 「大都市近郊の団地における高齢者の人間関係量と地域参加」『老年社会科学』28(4):450-63.

An Analysis of the Relationship between Job Carrier and Participation in Social Activities among the Elderly: Focus on the Longest Job Carrier

**Heiwa Date
(Shiga University)**

Abstract

In previous research, resource theory, which presumes that socio-economic resources such as education level, income and job effect on the participation in social activities, was investigated. In addition, previous research has paid much attention to social participation among all generation, rather the elderly. Furthermore, researchers have not much paid attention to previous job carrier, although they are interested in the effects of current job status. Thus, this paper aims to clarify the relationship between socio-economic resource and 5 types of social participation such as voting, supporting for political activity, civil movement, volunteering and participation in local governance among elderly. Especially, this paper focuses on the effect of “long carrier job” which represents the longest job of respondent in the past.

As a result, at first, the elderly tends to participate in these activities in the following order: voting, participation in local governance, volunteering, supporting for political activity, civil movement. Second, socio-economic resources are related to almost activities. Especially longest job carrier is related to volunteering. From these findings, regarding to the analysis about elderly, the importance of resource theory and the importance of focusing longest job carrier were revealed.

Key words: elderly, participation in social activities, longest job carrier